

令和元年度 記者懇談会（第8回）の記録

日 時 令和元年11月27日（水）午後3時30分
場 所 水道庁舎4階 会議室
記者数 7人
同席者 飯川副市長、若山副市長、総務部長、教育部長、図書館長
次 第 1. 氷室冴子青春文学賞記念トークショーの開催について
2. その他（質疑応答）



氷室冴子青春文学賞記念トークショーの開催について

説明内容

(市長)

12月1日、ホテルサンプラザにおいて、岩見沢出身の作家、故・氷室冴子さんにちなんだ「第二回氷室冴子青春文学賞」の受賞式が、NPO 法人の主催により開催されます。

その授賞式の終了後、岩見沢市立図書館の主催による「氷室冴子青春文学賞記念トークショー」を昨年に引き続き、開催します。

トークショーは、12月1日（日曜日）午後1時に開場、午後1時30分に開幕し、会場は授賞式と同じくホテルサンプラザ3階です。

トークゲストは、選考審査員をお務めになってくださる小樽出身の小説家、朝倉かすみさんです。朝倉さんは、年5月に小説「平場の月」で第32回山本周五郎賞を受賞されたほか、第161回直木賞候補になるなど、文壇や読者から高い評価を受けていらっしゃる方です。トークショーでは、朝倉さんの「氷室冴子の作品に対する思い」や「小説家になるまでに読んできた本」などについてお話しいただく予定です。

このほか、市内高校生による質問コーナーもあり、会場前のロビーでは氷室冴子の足跡をたどるパネル展示も行います。参加は無料、200人の方にご観覧いただけます。多くの方のご来場を期待しています。

質疑応答

なし

その他

質疑応答

岩見沢アール・ブリュット芸術祭 2019 を終えて

(北海道新聞)

今月10日から24日まで「岩見沢アール・ブリュット芸術祭 2019」が開催されましたが、それを終えての感想とアール・ブリュットによるまちづくりを今後どのように進めたいのか教えてください。

(市長)

岩見沢市は、アール・ブリュットの取り組みとして、昨年までフォーラムを3回開き、今年は2週間の芸術祭を開催しました。

初日のバリアフリー映画や最終日の「アール・ブリュットショウケース」などによる多彩なメニューで多くの人にお楽しみいただいたと思っています。フォーラムや基調講演では大変貴重なお話を聞くことができました。担当課によると、来場者数は2,617人でした。

今回の芸術祭の特徴は、ショウケースも同様ですが、道内だけではなく全国の作家からも出品していただいた点です。

昨年のフォーラムではフランス元首相であり、ナント市の名誉市長でもあるジャン・マルク・エローさんにお越しいただき、今年はフランス国立現代芸術センター リュー・ユニック館長のパトリック・ギゲールさんにお越しいただいたことから、国際的なフォーラムでもあります。

私自身の認識ではアール・ブリュットにはいくつか大きな意味があると思っています。

岩見沢市が目指しているのは、障がいのある方もない方も共に地域で暮らす共生社会の実現です。この共生社会の実現に向けて強いメッセージを持っているというのがアール・ブリュットの特徴の一つだと思っています。

現代アートの中で特に生の芸術として高い芸術性を持っている作品があるということについては大変大きな力だと思っています。

論点は変わるかもしれませんが、世界的に地域開発という意味で捉えると、ナント市の地域開発が世界の有数の成功例として取り上げられています。ナント市での芸術文化によるまちづくりには、これからの時代の中で、私どもとしても多いに学ぶべきものがあると認識しています。

アール・ブリュットに対する市民の受け止め方も、これまでの3回のフォーラムと今年の芸術祭を通して、アール・ブリュットがまちづくりに与える成果というか、影響というか、共生社会の実現という高い芸術性という意味では非常に評価も高まってきていると思います。

それから、市内には、芸術・文化・スポーツに特化した大学の北海道教育大学岩見沢校があり、そのような高等教育機関とも連携ができているということで、岩見沢のアール・ブリュットはほぼ定着してきていると思います。

したがって、ナント市の事例を参考に、これからの岩見沢市のまちづくりにおいて、アール・ブリュットをどう展開していくのかということが重要な課題だと思っています。

また、関係者からよく言われますが、日本全体、特に北海道、東北地方を見渡してみても、アール・ブリュットの拠点がありません。今回の基調講演を催したフォーラムでもいろいろご意見がありましたので、芸術文化におけるまちづくりの中でアール・ブリュットの果たす役割を改めて再検討しながら、今後の展開に繋げていきたいと思っています。

来年は東京オリンピック・パラリンピックが開催され、スポーツだけでなく、芸術文化の取り組みも盛り上がりを見せており、来年2月には障害者の文化芸術フェスティバルが開催され、その後、全国を巡回する予定になっています。全国の事業との連携を図りながら、来年の取り組みを進めていきたいです。

それと同時に、共生のまちづくりを象徴するような拠点についても構想していきたいなど私自身は思っています。

新庁舎の建設について

(読売新聞)

今朝、新庁舎の安全祈願祭がありました。新庁舎の特徴を改めて教えてください。

(市長)

設計の段階から、一つは簡素で経済性と機能性に優れた庁舎を建てるということと、庁舎を長く使うということを前提として、柔軟なユニバーサルレイアウトを採用するという。それからご存じの通り、現庁舎、特に本庁舎は昭和40年に建築された建物ですから、耐震性に欠け、老朽化し、狭隘化も進んでおり、機能を十分に発揮できないということがありました。これを解決します。

庁舎を建て替えるということは岩見沢市にとって大きな事業ですが、建てるのが目的ではなくて、建てた後に新庁舎の機能をフル活用し、市民の皆さまへのサービスをさらに充実するということが最も重要な目的であり、これにしっかり取り組みたいと思います。

それから、庁舎のガイドラインでは、電源、給排水など庁舎内のライフラインを72時間維持できるように、となっていましたが、昨年の北海道胆振東部地震における停電・ブラックアウトを経験し、設計の途中でしたがこれを大きく見直し、7日間168時間、自立して機能を継続できるようにしました。

当然のことながら、事業継続計画BCPも併せ、非常時でも市民の皆さまに対するサービスが復旧あるいは復興にしっかりとした役割を果たせるような市役所と組織にしていきたいと思っています。

地域医療について

(北海道新聞)

9月、厚生労働省により、再編統合について特に議論が必要な公立・公的病院の公表があり、その後、空知総合振興局で開催された説明会の質疑応答の中で、管内の医療関係者がお話しされていたのが、これから病院の再編・統合を考えていく中で、管内自治体の首長がリーダーシップを発揮して議論を進めてほしいということでした。

公表リストに岩見沢市は挙がっていませんが、岩見沢市立総合病院の基本構想の策定中であり、今後の議論の中では大きなポイントになると思います。南空知医療圏で岩見沢市がどのような役割を果たし、どのような議論を進めていこうと考えていますか。

(市長)

厚労省が公表したのは、平成29年6月の1カ月間の診療状況から公表に至ったものだと思いますが、全国の市長会ではいろいろな議論が巻き起こっています。それはそれとして、1カ月間の実情として把握する必要はあるのではないかと思います。

岩見沢市立総合病院の基本構想の策定作業を進めていますが、二次医療圏で急性期をどのように維持していくのか、どのように医療サービスを展開していくのかということが大きな課題だと思っています。

岩見沢市としては急性期をこれからどのようにしっかり確保・充実していくのか。

このことと各自治体の病院、あるいは民間病院も含め、どのような機能連携をしていくのかということがポイントになってくるのだろうと思います。もちろん救急体制も含めてですが。

(北海道新聞)

南空知医療圏の調整会議が議論の場になりますが、それ以外のところで、例えば自治体間の事務レベルでの協議を今後は進めていくのでしょうか。

(市長)

会議は北海道を中心に開催されていくと思います。各レベル・各層での会議、または首長が出席しての会議でこれから進んでいくのだと思います。

(NHK)

各自治体と病院が連携していく中で、岩見沢市のポジションや立ち位置をどのようにしていくべきかお考えは。

(市長)

先ほど申し上げたとおり、公立病院として急性期の中核を担っているのは岩見沢市立総合病院ですから、その機能をしっかり確立すること。それから、これからの時代、人口減少や高齢化が進んでいく中で、足りない病床はあるわけです。回復期の病床をどのように連携していくのかということ、リハビリ病棟などをどのように整備していくのかという課題があります。

岩見沢市立総合病院は、急性期をまず中心としながら、今後必要とされる病棟の整備をしていくことになると思います。

他の自治体の病院で急性期を担うということではなく、岩見沢市立総合病院の急性期の機能とどう連携するのかということがこれからのポイントになってくるのではないかと私自身はと思っています。

電子地域通貨について

(読売新聞)

岩見沢市内で電子地域通貨に関する動きはありますか。

(市長)

今のところ、そのような動きはありません。

これから先、マイナンバーの活用などいろいろ新しいことがあり、デジタルでそのようなことができる展開はソサイエティ 5.0 の中で十分に考えられますが、まだ当面、そこまでのことは考えていません。

ただ、現在取り組んでいる事業で、例えば、健康ポイントやプレミアム付建設券・商品券、このようなものがデジタル化されれば負担やコストも下がり、効率的になるのではないかという思いはあります。

(注) 記録の内容については、重複した言葉遣いや、明らかな言い直しがあったものなどを整理した上で作成しています。(作成：岩見沢市秘書課広報係)